

# 発達の観点からみた 女性の親との心理的距離と 自己規定要因の関係

三 田 英 二

**Relation between psychological distance  
and Self-Regulation Factor with women's parents**

**MITA Eiji**

## 要約

本研究は、女性の自己形成を検討する一環として、親との心理的な距離と自己規定要因との関係を発達の観点から検討したものであった。

その目的は、親への依存心・服従心によってグループ分けした4つの群、すなわち、「高依存・高服従」群、「高依存・低服従」群、「低依存・高服従」群、「低依存・低服従」群の4群が、成人期前期段階で、変容していくための、青年期後期段階での特徴を明らかにしていくものであった。

青年期後期群 90 名、成人期前期群 80 名を調査対象者とした。

自己規定要因を測定する用具としては、SEI-B（後述）を使用した。親との心理的な距離を測定する用具として、加藤・高木（1980）が作成した独立意識尺度を三田（2003）が因子分析した結果のうち、第2因子「親への依存」因子と第5因子「親への服従」因子の項目を用いた。

青年期後期群・成人期前期群別々に、4群に分け、SEI-B の下位因子得点について比較検討を行った。

この結果、否定的な自己の側面での自己規定の強弱が、その後の発達の方向を決める一因になることが示された。

## I. 問題

本研究は、「複雑」だと指摘される女性の自己形成（詳しくは、三田（2003）を参照していただきたい）を検討する一環として行われている。

親との心理的な距離との関係については、Self-Esteem（以下、SE と略記）（三田、2008b）、性格特性（三田、2010）との関連について検討が行われている。本研究では、親との心理的な距離と自己規定要因との関連について検討を行うことを目的としている。

特に、青年期後期段階での特徴を明らかにしたいと考えている。それは、青年期後期段階では、4群間に差異がなく、成人期前期段階で、親との心理的な距離の違いによって差異が生じる、という結果（三田、2008b,2010、詳細は後述）が得られているためである。成人期前期段階で差異が生じるためには、青年期後期段階で、何らかの差異があるはず、と推測される。この青年期後期段階での特徴を明らかにしていくことが、本研究の目的である。

これまでの結果は、SE との関係（三田、2008b）においては、青年期後期段階では、SE の総得点、各下位因子得点において、いずれも有意差が見られず、親子間の心理的な距離は、SE とは関係がないことが示された。しかし、成人期前期群では、SE 総得点で、「高依存・高服従群」<「低依存・低服従群」の有意差が、「低依存・高服従群」<「低依存・低服従群」の有意傾向も見られた。下位尺度でも、「自己矮小感」因子で「低依存・低服従群」は、他の群よりも、自己矮小感は有意（有意傾向）に低い（SE 得点としては、高 SE となる）ことが示された。さらに、青年期後期段階と成人期前期段階の発達の比較において、有意に得点を上昇させたのは、「低依存・低服従」群だけであった。親から心理的に最も離れている群が SE を上昇させることが示された。

性格特性（YG 検査）との関係（三田、2010）においても、青年期後期段階まで、親との心理的な距離に関係なく、性格特性は、各群とも類似したもの、すなわち、YG 検査の 12 下位因子において、4群間に有意差が見られなかった。しかし、成人期前期段階で性格特性に大きな差異が生じてくること、そして、成人期への移行期に（移行後に）、性格特性を変化させるか否かの軸が、親に対する心理的な依存心の高・低にある、すなわち、成人期前期段階の「低依存・低服従」群と「低依存・高服従」群が、青年期後期段階と発達の比較を行った場合でも、成人期前期段階の他の群と比較した場合でも、性格特性を情緒的にさらに安定させる方向へと大きく変化させていた。

特に、「低依存・低服従」群では、成人社会への移行期に（あるいは、移行後に）、SE をエネルギー源として、一気に性格特性（内的準拠）を再構成している姿が推測された。

しかし、三田（2008b）の調査においては、青年期後期段階での SE の質的な側面が検討されていなかった。成人期前期段階で大きく変化していくためには、その前段階となる青年期後期段階で、何かしらの質的な側面の違いがあるはず、と推測される。そこで改めて、青年期後期段階における 4群（「高依存・高服従」群、「高依存・低服従」群、「低依存・高服従」群、「低依存・低服従」群）の SE の質について検討を行った（三田、2016a,b）。

性格特性との関係から検討（2016a）したときには、4群間で大きな差異は見られなかったが、自己規定要因との関係から検討（2016b）したとき、「高依存・高服従」群と「低依存・低服従」群が、SE と自己規定要因の相関関係が類似したものとなっていて、この 2つの群は、「高依存・低服従」群と「低依存・高服従」群とは異なることを示した。ま

た、類似した相関関係を示した2群のうち、「低依存・低服従」群の方が、より明確にSEと自己規定要因が結びついていることが分かった。すなわち、青年期後期群における4群のSEは、量的には、同等だが、質的には異なっていることは確認できた。しかしそれは、ただ4群間で質的には異なっていることを推測させるだけで、4群のそれぞれの特徴まで明確にすることは出来なかった。

本研究は、親との心理的な距離とこの自己規定要因の関係を発達的な観点から検討するものである。上述のように、青年期後期段階では、SEも性格特性も4群間で差異が見られなかったが、成人期前期段階で、親に対する心理的低依存が、性格特性も、大きく変化させている。量的なSEの比較からは、青年期後期段階での4群間の違いが明らかにはならなかったが、SEの場合、青年期後期段階での質の違いが見られることが分かった。

4群間で、成人期前期段階に違いが見られるようになるためには、SE以外にも、青年期後期段階で何かしらの違いがあるはずであると推測される。本研究では、特に、この点について検討していくことを目的としている。

青年期後期段階のSEの質について検討した研究(三田、2016b)では、上述のように自己規定要因との関係で違いがあることが確認された。本研究では、この自己規定要因そのものを検討要因として取り上げ、青年期後期段階と成人期前期段階を比較することで、発達の観点から、4群の自己規定要因を検討することを目的とする。

なお、「自己規定要因」という用語は、もともと「重視される自己の諸側面」(三田、2008a)までに発表した論文で使用、2008a以降から「自己規定要に変更因」と表記していた。本研究では、「自己規定要因」や「重視される自己の側面」など、文脈によって、表記を変えるが、意味していることは同一と考えてもらいたい。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

本研究は、継続的に行っているものである。分析対象のデータは、この一連の分析を始めた当初(三田、2003)のものである。参考までに調査対象者について記しておく。

青年期後期段階の女性の調査対象者(以下、青年期後期群)90名(平均年齢19.18歳、SD=.76、range18-21)。成人期前期段階の女性の調査対象者(以下、成人期前期群)80名(平均年齢25.98歳、SD=2.09、range22-30)とした。なお、欠損値があるデータは今回の分析から除外しているため、下記(Table 1)に示す各群の人数と一致はしていない。

### 2. 調査用具

#### (1) 親との心理的な距離の測定およびグループ分け

同一データを用い分析しているため、調査対象者同様、これまで発表してきたものと同じである。

親との心理的な距離の測定についても、前研究(三田、2008b,2010)と同じであるが、参考までに簡略化したものを記載する(詳細は、三田、2003を参照されたい)。

加藤・高木(1980)が作成した独立意識尺度を三田(2003)が因子分析した結果、第1因子「自己決断力」、第2因子「親への依存」、第3因子「時間的展望の拡散」、第4因子

「反抗期心理」、第5因子「自信の欠如による親への服従（以下「親への服従」と略記）」の5因子が抽出されている（付録1参照）。

親との心理的な距離を測定する項目として、このうち、第2因子「親への依存」因子と第5因子「親への服従」因子の項目を用いる。

「親への依存」因子得点の理論上の range は8点から40点となる。「親への服従」因子得点の理論上の range は5点から25点となる。中央値は「親への依存」因子で、青年期後期群24点、成人期前期群25点、「親への服従」因子で、青年期後期群12点、成人期前期群11点となった。

青年期後期群・成人期前期群別々に、それぞれの因子得点の中央値をもとに、「高依存群・低依存群」、「高服従群・低服従群」に分け、分析用にさらにそれをクロスさせ、「高依存・高服従群」、「高依存・低服従群」、「低依存・高服従群」、「低依存・低服従群」の4群に分けた。その内訳を Table 1 に示す。

Table 1 各群の人数

青年期後期群	n	成人期前期群	n
高依存・高服従群	22	高依存・高服従群	24
高依存・低服従群	19	高依存・低服従群	16
低依存・高服従群	18	低依存・高服従群	9
低依存・低服従群	31	低依存・低服従群	31
合計	90	合計	80

## (2) 自己規定要因の測定

独立意識と自己規定要因との関係は検討されている（三田、2008a）。今回の分析は、これを更に詳細に分析していくことになる。このため、自己規定要因の測定についても、以前の研究（三田、2008a）と同一であるが、参考までに記載する。

Janis I.L.と Field P.B.A.（1959）が作成した Feeling Inadequacy Scale のうち、「不適切な感情（feeling inadequacy）」領域を翻訳し、長文になる質問項目は、遠藤ら（1981）が翻訳し、Self-Esteem 尺度とした SE- I 形式を参考に、意味が異ならないように質問文を短くし、回答方法を変えた質問紙を作成した（以下、SEI-B とする）。

この SEI-B は、各項目に対し、調査対象者個人にとり、その質問内容が「重要である」か「重要ではない」かの2件法で回答を求め、「重要である」と回答された場合1点とし、「重要ではない」と回答された場合0点として処理をした。「重要である」と回答した項目を自己規定する項目とした。

今回調査（三田、2003）で得られたデータで因子分析を行った。青年期後期群・成人期前期群併せて全体で因子分析し、主成分分析の上、バリマックス回転を行った。初期の固有値 1.0 以上で7因子が抽出された。しかし、因子の解釈において困難な因子があり、抽出因子数を6因子から2因子まで順次因子分析を行った。結局、固有値間の開きの程度、因子の解釈可能性、重複項目などを考慮し5因子が抽出された結果を用いることとした。絶対値.5以上の負荷量を示した項目を各因子の解釈の対象とした。5個の因子は全分散の 48.5 %を説明するものであった。回転後の各項目への因子負荷量等を付録2に示す。

5つの因子の因子名は、三田（2008a）で命名されている。三田（2008a）と重複するが、参考までに、命名の経緯も記載する。

第1因子は全分散の21.1%を説明するもので、他者からどのように評価されているか気になる、といった項目（項目19, 21, 22, 23）で占められた。前回筆者が行った因子分析結果（三田, 1984）から項目9と10が抜けたものであった。前回同様「他者評価」と命名する。

第2因子は全分散の8.2%を説明するもので、社会的場面・対人場面での否定的な自己意識を示す項目（項目11, 12, 13, 14）が負荷した。この因子も前回分析（三田, 1984）から項目18と20が抜け落ちたものである。前は「社会的自己」と命名したが、否定的内容を明確にするため今回は「否定的社会的自己意識」と命名する。

第3因子は全分散の7.2%を説明するものであった。前回分析時（三田, 1984）に「肯定的自己価値」因子に入った項目2と「否定的自己価値」因子に入った項目5, 6が同じ因子に負荷した。また、前回分析（三田, 1984）でどの因子にも入らなかった項目8の4項目から構成された。項目5, 6, 8は否定的な意味合いである。そこに前回「肯定的自己価値」因子に入った項目2は、前回と意味合いを異にし、「自分に価値があるかどうか不安である」という意味合いが強くなっているために、この因子に含まれたものと思われる。「自己価値への不安」と命名する。

第4因子は全分散の6.2%を説明するものであった。この因子に含まれる項目は、現状の自分の能力に対する不安（項目9, 10）と将来的には成功するといった自負心（項目3）といった内容である。将来的には尊敬されるといった自負心は、現状では、まだ努力が不足しているなど、現状の能力に対する不安の裏返しと表現とされる。「自己能力への不安」と命名する。

第5因子は全分散の5.7%を説明するものであった。この因子に含まれるのは前回分析（三田, 1984）での第6因子「コミュニケーション」と同一である。会話場面での不安を示す項目（項目16, 18）であった。前回（三田, 1984）同様「コミュニケーション」と命名する。

SEI-Bの下位尺度は、否定的な内容でしめられているが、これまでの検討の結果（三田, 1994, 1996, 1999）、自己否定を示しているのではなく、他者との関係を重視し、自己の否定的な側面を他者に指摘されないよう、自分の所作・振る舞いに気をつけるため、自己の否定的な側面を重視していることが推測されている。本研究の考察に当たっては、このことも踏まえながら行っていく。

また、SEI-Bで抽出された5因子は、外面的で否定的な自己認知を示す3因子（「他者評価」、「否定的社会的自己意識」、「コミュニケーション」）と内面的で否定的な自己認知を示す因子（「自己価値への不安」と「自己能力への不安」）の2因子として考えている（三田, 2008a）。

### III. 結果

「親への依存」因子と「親への服従」因子の青年期後期群と成人期前期群の得点の比較は行われており、両因子とも得点上差異はないことが示されている（三田, 2003）。

### 1. 青年期後期群・成人期前期群別の4群比較

「高依存・高服従」群、「高依存・低服従」群、「低依存・高服従」群、「低依存・低服従」群の4群について、SEI-Bで測定される5下位因子の平均値を青年期後期群・成人期前期群別にそれぞれ求め、青年期後期群・成人期前期群別々に多重比較（分散分析）を行った。

青年期後期群の分散分析結果をTable 2に示す。

**Table 2 青年期後期群の分散分析結果**

SEI-Bの下位因子	F	df	p
他者評価	1.58	3,85	n.s.
否定的社会的自己意識	2.89	3,86	**
自己価値への不安	3.93	3,85	**
自己能力への不安	3.35	3,85	**
コミュニケーション	.37	3,86	n.s.

\*\*・・・p<.05、\*\*\*・・・p<.01、\*\*\*\*・・・p<.005

青年期後期群では、「否定的社会的自己意識」因子において、5%水準での有意差(F(3,86)=3.86)、「自己価値への不安」因子で、5%水準の有意差(F(3,85)=3.93)、「自己能力への不安」因子で、5%水準の有意差(F(3,85)=3.35)がみられた。

同様に、成人期前期群の分散分析結果をTable 3に示す。

**Table 3 成人期前期群の分散分析結果**

SEI-Bの下位因子	F	df	p
他者評価	2.94	3,76	**
否定的社会的自己意識	2.97	3,75	**
自己価値への不安	.91	3,76	n.s.
自己能力への不安	1.22	3,76	n.s.
コミュニケーション	.66	3,75	n.s.

\*\*・・・p<.05、\*\*\*・・・p<.01、\*\*\*\*・・・p<.005

成人期前期群では、「他者評価」因子(F(3,76)=2.94)と「否定的社会的自己意識」因子(F(3,75)=2.97)で、ともに5%水準の有意差がみられた。

分散分析の結果、有意差がみられたSEI-Bの下位因子について、青年期後期群、成人期前期群ごと、その後の検定（平均値の差の検定：t検定）を行った。その結果を、Table 4～8に示す。

**Table 4 青年期後期・SEI-B（「否定的社会的自己意識」因子）（最小有意差法）**

	n	平均値	SD	(1)	(2)	(3)	(4)
高依存・高服従群 (1)	22	2.86	.94				
高依存・低服従群 (2)	19	2.42	1.12				
低依存・高服従群 (3)	18	2.17	1.10	+			
低依存・低服従群 (4)	31	1.97	1.25	***			

+...p<.10    \*\*...p<.05    \*\*\*...p<.01    \*\*\*\*...p<.005

分散分析の結果、有意差がみられた青年期後期群の「否定的社会的自己意識」因子では、「高依存・高服従」群>「低依存・高服従」群の有意傾向と「高依存・高服従」群>「低依存・低服従」群の有意差（1%レベル）がみられた（Table 4）。

このことは、青年期後期段階では、「低依存・高服従」群・「低依存・低服従」群に比べ「高依存・高服従」群が他者からの評価で自己規定していることを示している。

**Table 5 青年期後期・SEI-B（「自己価値への不安」因子）（最小有意差法）**

	n	平均値	SD	(1)	(2)	(3)	(4)
高依存・高服従群 (1)	21	2.76	1.09				
高依存・低服従群 (2)	19	2.58	1.35				
低依存・高服従群 (3)	18	2.56	1.29				
低依存・低服従群 (4)	31	1.71	1.22	****	**	**	

+...p<.10    \*\*...p<.05    \*\*\*...p<.01    \*\*\*\*...p<.005

分散分析の結果、有意差がみられた青年期後期群の「自己価値への不安」因子では、「高依存・高服従」群>「低依存・低服従」群、「高依存・低服従」群>「低依存・低服従」群、「低依存・高服従」群>「低依存・低服従」群という有意差がみられた（Table 5）。

このことは、青年期後期段階においては、「低依存・低服従」群以外の3つの群は、「低依存・低服従」群と比べ、自己価値に対する不安をより重視し、自己規定していることを意味している。

**Table 6 青年期後期・SEI-B（N（「自己能力への不安」因子）（最小有意差法）**

	n	平均値	SD	(1)	(2)	(3)	(4)
高依存・高服従群 (1)	22	1.86	.89				
高依存・低服従群 (2)	19	1.47	.77				
低依存・高服従群 (3)	17	1.76	.90				
低依存・低服従群 (4)	31	1.16	.90	***		**	

+...p<.10    \*\*...p<.05    \*\*\*...p<.01    \*\*\*\*...p<.005

分散分析の結果、有意差がみられた青年期後期群の「自己能力への不安」因子では、「高依存・高服従」群>「低依存・低服従」群、「低依存・高服従」群>「低依存・低服従」群という有意差がみられた。

このことは、「高依存・高服従」群と「低依存・高服従」群は、「低依存・低服従」群に比べ、自己の能力への不安を重視し、自己規定していることを示している。

**Table 7 成人期前期・SEI-B (N (「他者評価」因子) (最小有意差法)**

	n	平均値	SD	(1)	(2)	(3)	(4)
高依存・高服従群 (1)	24	2.25	.35				
高依存・低服従群 (2)	16	2.00	.35				
低依存・高服従群 (3)	9	1.67	.41				
低依存・低服従群 (4)	31	1.13	.24	***	+		

+...p<.10    \*\*...p<.05    \*\*\*...p<.01    \*\*\*\*...p<.005

分散分析の結果、有意差がみられた成人期前期群の「他者評価」因子では、「高依存・高服従」群>「低依存・低服従」群という5%水準の有意差と「高依存・低服従」群>「低依存・低服従」群という有意傾向が見られた。

このことは、「高依存・高服従」群と「高依存・低服従」群は「低依存・低服従」群と比べ、他者からの評価を重視し、自己規定していることを示している。

**Table 8 成人期前期・SEI-B (「否定的社会的自己意識」因子) (最小有意差法)**

	n	平均値	SD	(1)	(2)	(3)	(4)
高依存・高服従群 (1)	23	2.61	1.37				
高依存・低服従群 (2)	16	2.00	1.55				
低依存・高服従群 (3)	9	2.78	1.56				
低依存・低服従群 (4)	31	1.58	1.41	**		**	

+...p<.10    \*\*...p<.05    \*\*\*...p<.01    \*\*\*\*...p<.005

分散分析の結果、有意差がみられた成人期前期群の「否定的社会的自己意識」因子では、「高依存・高服従」群>「低依存・低服従」群、「低依存・高服従」群>「低依存・低服従」群という5%水準での有意差がみられた。

このことは、「高依存・高服従」群と「低依存・高服従」群は、「低依存・低服従」軍医比べ、社会的場面での所作・振る舞いを重視し、自己規定していることを示している。

## 2. 青年期後期群・成人期前期群間での SEI-B 下位因子ごとの平均値の比較

次に、発達により、自己規定要因をどのように変化させていくか(あるいは、変化させないか)を検討するため、親との心理的な距離が同一の群ごと青年期後期群・成人期前期群間で SEI-B の 5 下位因子について平均値の有意差検定 (t 検定) を行った。有意差がみられた因子だけを Table 9 ~ 11 に示す。

青年期後期群・成人期前期群間で有意差 (有意傾向) がみられたのは、「低依存・高服従」群での「他者評価」因子 (t=2.51,df=25,p<.05) と「低依存・低服従」群での「他者評価」因子 (t=3.09,df=56.71,p<.005)、同じく「低依存・低服従」群の「コミュニケーション」

因子 (t=1.84,df=60,p<.10) であった。

**Table 9 同一群での比較 (「低依存・高服従」群)**

他者評価	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	18	2.94	1.26	25	2.51	**
成人期前期群	9	1.67	1.22			

+...p<.10   \*\*...p<.05   \*\*\*...p<.01   \*\*\*\*...p<.005

**Table 10 同一群での比較 (「低依存・低服従」群)**

他者評価	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	30	2.27	1.55	56.71	3.09	****
成人期前期群	31	1.13	1.31			

+...p<.10   \*\*...p<.05   \*\*\*...p<.01   \*\*\*\*...p<.005

**Table 11 同一群での比較 (「低依存・低服従」群)**

コミュニケーション	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	31	1.10	.87	60	1.84	+
成人期前期群	31	.71	.78			

+...p<.10   \*\*...p<.05   \*\*\*...p<.01   \*\*\*\*...p<.005

これらのことは、「低依存・高服従」群においては、「他者評価」因子での自己規定が、発達的に減少したことを意味している。「低依存・低服従」群においては、「低依存・高服従」群同様、「他者評価」因子での自己規定が減少し、「コミュニケーション」因子でも同様に自己規定が発達的に減少していることを示している。

#### IV. 考察

以下のことを考察を行う前提として考えている。

方法で記載した内容と重複するが、SEI-B の下位尺度は、否定的な内容でしめられている。しかし、その項目に「重視している」と回答しても、それは、自己否定を示している訳ではなく、他者から自己の否定的な側面を指摘されないように、あるいは、気づかれないうように、自己の否定的な側面に關心を払い、重視し、自分の所作・振る舞いに気をつけていると推測している (三田、1994,1996,1999)。自己否定ではなく、自己の否定的な側面が外顯しないように重視していると考えているため、本研究では、外顯させないで隠す、という意味で“壁”、あるいは、気にしている、気をとられているという意味で、自己への「とらわれ」と表現する。

もともと、自尊心や自己評価を維持することは、人の基本的な欲求であるという指摘 (例えば、Epstein, S., 1973, Tesser, A., 1988 など) もあるため、自己の否定的な側面を重視しても、自己否定しているわけではないと考えている。

これも重複するが、SEI-B で抽出された5因子は、外面的で否定的な自己認知を示す3

因子（「他者評価」、「否定的社会的自己意識」、「コミュニケーション」）と内面的で否定的な自己認知を示す因子（「自己価値への不安」と「自己能力への不安」）の2因子として考えている（三田、2008a）。

また、親への心理的な依存心については、以下のように考えている。

もともと、心理的依存に関して、「西欧的な公式である＜依存から独立へ＞の下で、＜依存＞は抑圧・禁止されるべき否定的概念」（渡邊、1995）という指摘があり、以前、この指摘を前提として「発達段階によって、社会から望まれる親子関係があり、青年期の終了までは、親から心理的な自立をしていなくとも、心理的な圧力にはならないが、社会から親との心理的自立を図るべきと要請される発達段階になると、親から心理的に自立していないことが逆に心理的な圧力となること・・・（以下、略）」（三田、2008b）と推測している。

しかし、筆者は以前（三田、2008a）、Fairbairn,R. (1952/1995) の「乳児的依存の段階」から「成熟した依存の段階」への発達過程が健全な発達過程であるという指摘を引用し、依存心を「抑圧・禁止されるべき否定的概念」と考えているわけではないことに言及した。そして、岡本（1997）が論じた「個としてのアイデンティティ」・「関係性に基づくアイデンティティ」を念頭に置きながら、さらに、「個」としての自己確立を目指す自己形成のあり方だけでなく、心理構造が成熟するまでは、親を中心とした自己を包み込んでくれる存在（緩衝器）とともに、あるいは利用しながら、成熟していくプロセスも人格発達の一つのモデルとなること」（p.13）について論じたことは付け加えておきたい。

これまでの研究（三田、2008b,2010）では、成人期前期段階で4群間で差異が見られたものの、青年期後期段階では、4群間に差異が見られていない。しかし、成人期前期段階で差異が見られるためには、その前段階である青年期後期段階での4群間の特徴は異なるものと推測される。本研究では、4群間で、成人期前期段階に違いが見られるようになるための青年期後期段階での各群の特徴を明らかにし、成人期前期段階で変容していくための要因を検討していくことを目的としている。

青年期後期群（Table 2）で、SEI-Bの5下位因子で各群間に有意差が見られたのは、「否定的社会的自己意識」因子、「自己価値への不安」因子、「自己能力への不安」因子の3因子であった。前研究（三田、2008b,2010）において、4群間での差異が見られなかった、SEや性格特性と異なり、自己規定要因では、青年期後期段階から4群間での差異が認められた。

前研究（三田、2008b,2010）では、親との心理的な距離が離れている群（「低依存・高服従」群と「低依存・低服従」群）が、成人期前期段階に、その心理構造を変容させていった。

成人期前期群（Table 3）では、外面的な自己の側面を示す2因子（「他者評価」因子、「否定的社会的自己意識」因子）だけに、4群間での差異が見られ、内面的な自己の側面では、4群間での差異は見られなかった。

以下、このことについて、先ず、青年期後期群・成人期前期群別に考察を行う。続いて、同一群での青年期後期群と成人期前期群の比較を行い、最終的に、総括的な議論をしていきたいと考えている。

## 1. 青年期後期群

### (1) 「高依存・高服従」群について

青年期後期群の「否定的社会的自己意識」因子では、「高依存・高服従」群>「低依存・高服従」群の有意傾向と「高依存・高服従」群>「低依存・低服従」群の有意差（1%レベル）がみられた（Table 4）。

本研究を始めるきっかけの一因ともなった、女性の自己形成が複雑だという指摘（詳しくは、前述の通り、三田（2003）を参照してもらいたい）について、以前、以下のような推測を行った。

「青年期後期における女性の自己形成は、相対的に自己を把握することで、「外面－内面」の軸よりも「肯定－否定」の軸から分化が始まると推測される。…（中略）…青年期を通し、自己の否定的側面が自己形成に重要な役割を果たすことになる。しかし、何故「重要である」のかと考えたとき、自己の外面的で否定的な側面は内的準拠枠ではなく、自己の内面的な未熟さを覆い隠すための“壁”としての機能を担っているから「重要である」のではないかと思われる。…」（三田、2004、p.50）。

すなわち、外面的で否定的な自己の側面を重視することは、前述の通り、自己否定しているのではなく、内面的な自己が成熟するまで、他者からの注意・批判が、直接、内面的な自己意識に影響を与えないようにするため、それを緩衝器として利用している。また、否定的で外面的な自己の側面が緩衝器としての役割を果たしているため、“壁”と表現した。

そして、上述のようなこれまでの研究から、自己意識の構造を「肯定－否定」の軸と「外面－内面」の軸が直交しているのではなく、内面的な自己の側面を外面的な自己の側面（特に、否定的な側面）が覆い隠すような同心円状の二重丸の構造（内側が内面的側面、外側が外面的側面）となっていると推測していた。

本研究の結果から、4群とも同じ自己意識の構造を持つのではなく、親との心理的な距離の違いにより異なり、このような同心円状の二重構造の自己意識の構造を持つのは、「高依存・高服従」群ということになると推測された。

### (2) 「高依存・低服従」群について

「高依存・低服従」群は、「自己価値への不安」因子で、「低依存・低服従」群との有意差（「高依存・低服従」群>「低依存・低服従」群、5%水準、Table 5）が見られた。

「高依存・低服従」群は、「…自己中心的な側面が推測でき、幼児的な万能感を継続することで、SEを維持しているとも推測される。」（三田、2008b）と考えていたが、本研究の結果から、SEの本質的な側面である「自己価値」に対する不安を、「低依存・低服従」群と比較した場合に、「高依存・低服従」群が重視していることが示された。決して、幼児的な万能感を引きずっているだけではなく、自分の自己価値に対する懐疑的な側面も併せ持っていることを示唆した。

この自己価値に対する懐疑的な感覚は、自己否定にも通じるもので、自己否定から自己の再構成という従来指摘されてきた自己形成をしていく可能性があることを本研究は示唆している。

### (3) 「低依存・高服従」群について

「低依存・高服従」群は、親との親和性を保ちながら、自己形成していく群と考えていた。本研究の結果から、「否定的社会的自己意識」因子において、有意傾向ではあるが、「高依存・高服従」群>「低依存・高服従」群の関係が見られ (Table 4)、また、否定的で内面的自己認知を示す「自己価値への不安」因子 (Table 5) と「自己能力への不安」因子 (Table 6) において、「低依存・低服従」群と比較した場合、「低依存・高服従」群は、否定的で内面的な自己の側面を、より重視している結果が得られた。

この結果から2種類の解釈が考えられる。

先ず一方は、「高依存・高服従」群のように、否定的で外面的な自己の側面を“壁”として利用している、という解釈である。「低依存・高服従」群での「高服従」は、上述のように、親との親和性を保つため、肯定的な意味合いとしての「高服従」と考えていたが、「低依存・低服従」群と比べたときには、「低依存・高服従」群の「高服従」は、肯定的な意味合いだけでなく、内面的で否定的な自己の側面を重視していることから、否定的な意味合いも含まれていることを本研究の結果は示唆している。このことは、親からの心理的な自立という観点から、「高服従」であることに、内面的で否定的な自己の側面の重視という形で、「親への服従」を否定的なイメージとして自覚している、という解釈である。

もう一方では、「低依存・高服従」群は、外面的で否定的な自己の側面は、自己の内面的な未熟さを覆い隠す“壁”ではなく、否定的な自己の内面への重視は、自己改革への動機付けとなっている、という解釈である。Table 4 で示されているように、「否定的社会的自己意識」因子において、「高依存・高服従」群>「低依存・高服従」群という有意傾向が見られている。4群中、“壁”（「否定的社会的自己意識」因子）を最も有効利用している「高依存・高服従」群と差異があり、“壁”としての自覚はないと推測されるし、そもそも、内面的で否定的な自己を覆い隠す必要がないと推測できる。覆い隠すよりは、自己改革への動機付けとなっていると考えられる。それは、前研究（三田、2010）で示された、青年期後期段階から成人期前期段階へと移行した結果、内的準拠枠としての性格特性が、情緒的に安定する傾向を示し、「低依存・低服従」群と類似するものに変容していたことから推測される。

前研究や本研究の結果を合わせ考えると、「低依存・高服従」群の特徴は、後者の解釈が支持されると推測される。

このため、この「低依存・高服従」群は、前研究（三田、2010）で推測したように、親との親和性を保ちながらも、自己否定から自己の再構成といった自己形成を目指す傾向が強いことを示唆していると思われる。

### (4) 「低依存・低服従」群について

「低依存・低服従」群は、SEI-B で有意差が見られた下位因子（「否定的社会的自己意識」因子、「自己価値への不安」因子、「自己能力への不安」因子）において、他の群と比べ、最も得点が低い (Table 4,5,6)。「高依存・高服従」群が、外面的で否定的な自己の側面を“壁”として活用しているのであれば、「低依存・低服従」群は、“壁”を必要としない群、否定的な自己の側面に「とらわれ」を持たない群と考えられる。従来から指摘され

ている自己形成過程、すなわち、ストレートに児童期との決別から自己の再構成目指す群と考えられる。

## 2. 成人期前期群

成人期前期段階では、内面的な自己の側面での重視度の違いは、4群間でなくなり、外面的な自己の側面での重視度の違いだけになってくる。外面的な自己の側面で、4群間で有意差が見られたのは、「他者評価」因子と「否定的社会的自己意識」因子である。

「他者評価」因子では (Table 7)、「高依存・高服従」群>「低依存・低服従」群 (1%水準)、「高依存・低服従」群>「低依存・低服従」群 (有意傾向) であった。「否定的社会的自己意識」因子では (Table 8)、「高依存・高服従」群>「低依存・低服従」群、「低依存・高服従」群>「低依存・低服従」群であった。

### (1) 「高依存・高服従」群について

「高依存・高服従」群と「低依存・低服従」群の関係は、青年期後期段階でも見られている同様の関係で、「高依存・高服従」群は、成人期前期段階でも、否定的で外面的な自己の側面を“壁”として用いていることが推測される。

以前検討した SE (三田、2008b) や性格特性 (三田、2010) で、「高依存・高服従」群は、量的な SE や性格特性で、青年期後期群と成人期前期群の間で大きな違いが見られていない。本研究においては、青年期後期段階で見られていた、「自己価値への不安」因子 (Table 5) や「自己能力への不安」因子 (Table 6) などの内面的で否定的な自己の側面を重視していたこともあり、青年期後期段階では、これを覆い隠す“壁”の存在を想定した。しかし、成人期前期段階では、この内面的で否定的な自己の側面への重視度は、4群間で差異がなくなるものの、“壁”の役割を担う、外面的で否定的な自己の側面への重視度は、さらに強まっている。すなわち、青年期後期段階では、「否定的社会的自己意識」因子だけに有意差が見られたのに対し、成人期前期段階では、「否定的社会的自己意識」因子だけでなく、「他者評価」因子でも有意差が見られている。

このことは、“壁”の果たす役割が変化した結果、外面的で否定的な自己の側面に対する重視を強化する必要に迫られた、と考えられるのではないだろうか。

もともと、考察の前提と考えた渡邊 (1995) の指摘や発達段階によって異なる心理的圧力、要するに、成人期前期段階になると親への依存心・服従心は、渡邊が指摘した「西欧的な公式」に反するため、成人期前期段階の「高依存・高服従」群は、心理的な圧力と感じてしまうのではないだろうか。

青年期後期段階では、心理的な親への自立の有無にかかわらず、実質的には、多くの側面で親に依存している (例えば、同居などの物理的な側面や経済的な側面など) が、青年自身は、そのことは生得的なことであり、自覚されていない可能性があるため、親に対する依存心・服従心は、青年期後期段階では、心理的な圧力とはならないことは、以前、論じた (三田、2008a,2008b,2010)。

繰り返しになってしまうが、青年期後期段階の「高依存・高服従」群では、内面的で否定的な自己の側面を覆い隠すための“壁”であるが、実質的に親からの心理的・物理的両

面での自立が求められる成人期前期段階の「高依存・高服従」群では、内面的で否定的な自己の側面を覆い隠すというよりは、親への心理的依存・服従を他者に気づかれないように“壁”を利用しているのではないだろうか。

このことは、青年期後期段階での「高依存・高服従」群は、内面的な自己の側面への重視度が他の群よりも有意に高い (Table 5, 6) が、成人期前期段階での「高依存・高服従」群は、内面的な自己認知を示す因子に、4群間で差異が見られない (Table 3) ことから指摘できるのではないだろうか。成人期前期段階では、「高依存・高服従」群だけが、内面的な自己の側面を特に重視しているというわけではない、という点から考えると、内面的で否定的な自己の側面を覆い隠すのではなく、「西欧的な公式」(渡邊、1995) に反するので、他者に気づかれないように、自らの言動、所作・振る舞いに注意する、すなわち、“壁”の果たす役割が変化したのではないだろうか。

親への依存心は、青年期後期段階では、生得的で自覚されないものであっても、発達段階が進んだ成人期前期段階では、成人自身が置かれている社会的環境などが影響し、親に依存していることを自覚せざるを得ないのではないだろうか。このことは、渡邊 (1995) が指摘するような「西欧的な公式」が日本にも浸透していることを示唆しているのかもしれない。

## (2) 「高依存・低服従」群について

「他者評価」因子で、「高依存・低服従」群 > 「低依存・低服従」群の有意傾向が見られている (Table 7)。

青年期後期段階では、「低依存・低服従」群との間で「自己価値への不安」因子で有意差 (「高依存・低服従」群 > 「低依存・低服従」群) があり、「幼児的な万能感に基づく自己価値」への懐疑的な自覚から、青年期後期段階において、自己改革への足がかりを得たと考えることが出来るかもしれない。同様に「低依存・低服従」群との比較ではあるが、青年期後期段階で足がかりを得た結果、成人期前期段階において、「他者評価」因子で、差異が見られ、成人期前期段階という発達段階に期待される社会的行動が自覚されるようになっていないだろうか。このため、「自己中心的で幼児的な万能感に基づく行動」を外顕させないように注意するため、他者からの評価に関心を向け、結果的に、「他者評価」因子を重視するようになったと推測される。つまり、自分自身にとって何が重要か、すなわち、自己規定要因の変動によって、自己成長がはかられることを示唆する結果と思われる。

## (3) 「低依存・高服従」群について

「否定的社会的自己意識」因子において (Table 8)、「低依存・高服従」群 > 「低依存・低服従」群の有意差が見られた。

「低依存・高服従」群は、当初、「親との愛着関係は薄い、親の指示にさえ従っていれば安定しているという意味で SE を維持できるのではないだろうか。」(三田、2008b) と推測していたが、その後、「…親との親和性を維持するために、能動的に「服従」していると考えた方が妥当なもの…」(三田、2010) と親との親和性を重視する群であることが分かってきた、ということは、前述の通りである。

このように、「低依存・高服従」群と「低依存・低服従」群の違いは、親から心理的な自立をどのように果たすのか、親との親和性をどのように考えているかの違いと考えている。

このことを前提に、本研究の結果（Table 8）から改めて考えてみると、「低依存・高服従」群の否定的で外面的な自己の側面の利用方法として、前述の青年期後期段階と同様に、「高依存・高服従」群のように“壁”として用いるのではなく、他者との親和性を図るために、社会的な場面での所作・振る舞いに気をつけ、結果的に、「低依存・高服従」群>「低依存・低服従」群となったと考えられるのではないだろうか。他者との親和性を維持するためにとられる行動の反映ではないだろうか。

#### （4）「低依存・低服従」群について

青年期後期段階でもそうであったように、成人期前期段階の「低依存・低服従」群は、他の3群と比べ、自己の各側面への自己規定度は最も低い。

ただ異なることは、青年期後期段階では、自己の内面・外面的側面を示す因子双方で4群間に差異が見られているのに対し、成人期前期段階では、内面的自己認知を示す SEI-B 下位因子では、4群間で差異がなく、外面的側面を示す因子（「他者評価」因子、「否定的社会的自己意識」因子）でのみ差異が見られていることである。成人期前期段階になると、自己の内面的な側面に関心を向け（重要視する）、それによって自己規定することには、4群間での差異はなくなり、内面的なことよりも、他者から評価されたり、社会的場面での所作・振る舞いに関心を向けることに4群間で差異が生じている。このことは、成人期前期段階での「高依存・高服従」群で引用・指摘した、“壁”の役割が変化したことや社会から要請される親子関係のあり方、また、渡邊（1995）の指摘した「西欧的な公式」などが関係し、親への依存心・服従心が否定的な感情に結びついていて、この親への依存心・服従心から、最も離れている「低依存・低服従」群は、否定的な自己の側面を重視する必要がない群ということが出来る。すなわち、否定的な自己の側面への「とらわれ」を持たずにすんでいる群といえる。

また、SE で検討を行った前研究（三田、2008b）では、RSE（Rosenberg Self-Esteem 尺度）の下位因子である「自己矮小感」因子で、「低依存・低服従」群が、4群間で最も得点が低かった（SE の得点としては、高 SE となる）。自己矮小感の低さは、否定的な自己の側面を重視する必要がないことに通じる。この前研究の結果は、本研究の結果を裏付けているものと考えられる。

### 3. 青年期後期群・成人期前期群の同一群での比較

発達していく中で自己規定要因がどのように変化していくかを検討するため、青年期後期群と成人期前期群での同一群ごと、SEI-B 下位因子得点平均値の有意差検定（t 検定）を行った。以下、各群ごと検討していく。

#### （1）高依存・高服従群

この群では、青年期後期群と成人期前期群との間に、SEI-B の5つの下位因子で、差異

は見られなかった。

SE との関連から検討した際（三田、2008b）には、この群は、本研究と同様、発達的な変化は見られなかった。また、性格特性（YG 検査）で検討した際（三田、2010）には、O 因子（主観的－客観的）で、有意差が見られたが、YG 検査の判定上、大きな差異とは、考えられなかった。つまり、2つの前研究で、この「高依存・高服従」群は、発達的に変化が見られない群と考えられていた。

本研究でも、青年期後期段階と成人期前期段階の5つの下位因子得点の差異は見られない。この群は、青年期後期段階・成人期前期段階ともに、外面的で否定的な自己の側面を重視する群である。否定的な自己の側面を解決（あるいは解消）し、受容するという課題を継続している群とも考えられる。

実証的なデータがないため単なる推論となってしまうが、否定的な自己の側面への重視」という観点から離れば、本論2－（1）の成人期前期段階での「高依存・高服従」群で論じたように、親を緩衝器として利用しながら成熟していくタイプなのかもしれない。

## （2）高依存・低服従群

この群も、「高依存・高服従」群同様、発達的な変化は見られていない。

SE で検討した際（三田、2008b）でも、変化は見られなかった。しかし、YG 検査では、A 因子（服従的－支配的）で、有意差が見られたものの、上述の「高依存・高服従」群同様、YG 検査の判定上では、大きな差異はないと考えられている。

しかし、SEI-B の5下位因子での得点上の差異はないが、前述の青年期後期段階、成人期前期段階ごとの検討において、「低依存・低服従」群との比較で、自己価値への懐疑心から自己改革への足がかりをつかみ、自己の幼兒的な万能感や自己中心的な行動が外顕しないように注意を向けるといった発達的な変化が推測される。すなわち、青年期後期段階での内面的な自己の否定的イメージをきっかけとして、成人期前期段階で、外顕する行動上の問題に関心を向ける、といった変化が見られた。

重複するが、この群は、自己規定要因の変動により、自己成長を図る群かもしれない。

## （3）低依存・高服従群

この群では、SEI-B 下位因子「他者評価」で、青年期後期群>成人期前期群の有意差（5%水準）が見られた。成長とともに、他者からの評価を重視しなくなっていくことを示している。

SE で検討した際（三田、2008b）には、上記2群と同様に、発達的な変化は見られなかったが、性格特性で検討した際（三田、2010）には、発達的に、気分の変化（C 因子）は減少し、客観的傾向（O 因子）、協調的な傾向（Co 因子）、思考的外向の傾向（T 因子）が強まることを示した。そして、この群は、親との親和性を維持しながら成長していく群と考えられた。

しかし、「他者評価」を重視していくことが減少していった本研究の結果は、これまでのこの群の特徴と矛盾するようにも見える。それは、親（他者）との親和性を維持するためには、親（他者）からの評価も考慮されると考えられるからである。その他者評価に対する考慮が減少していることが、矛盾のように感じられるからである。

2つの解釈が出来ると思われる。

第1点目の解釈として、否定的で外面的な自己の側面を、内面的な自己が成熟するまで、内面的な自己を覆い隠す“壁”として考えれば、青年期後期段階での「他者評価」因子の重視は、「高依存・高服従」群のように、“壁”としての機能を持たせたものであり、発達の重視度が減少していくことは、“壁”としての役割が、終わろうとしている姿を示していることを表している、という解釈である。

第2点目の解釈として、後述する「低依存・低服従」群同様、否定的な自己の側面に対する「とらわれ」をさらに減少させていった、という解釈である。

後述の「低依存・低服従」群と合わせ考えると、第2点目が支持されると考える。それは、本研究では、後述するように、否定的な自己の側面への「とらわれ」の強弱が、青年期後期段階から成人期前期段階にかけての自己改革に影響を与えていると考えるからである。この「低依存・高服従」群は、青年期後期段階から成人期前期段階にかけて、自己改革を行っている。これは、否定的な自己の側面への「とらわれ」の減少が影響したと考えられる。すなわち、「他者評価」因子が有意に得点を減少させたことが、その証左となる。

#### (4) 低依存・低服従群

SEI-B 下位因子「他者評価」で有意差 (0.5 %水準) が見られる (Table 10)。「コミュニケーション」因子では、有意傾向 (Table 11) が見られている。ともに、青年期後期群 > 成人期前期群である。上述の「低依存・高服従」群と類似した結果を示した。

有意差 (有意傾向) が見られた因子は、否定的で外面的な自己の側面を示す因子で、上述の“壁”を示す因子である。青年期後期段階では、「低依存・低服従」群と「高依存・高服従」群との比較において、「高依存・高服従」群が、内面的な自己を覆い隠すように、否定的で外面的な自己の側面を“壁”のように活用している、と考察した。しかし、「低依存・低服従」群という親からの心理的自立度が、4群中最も高いと考えられている群では、“壁”と考えるよりは、上述の「低依存・高服従」群と同様に、否定的な自己の側面に対しての「とらわれ」をさらに減少させたと考えられるべきと思われる。

この群は、本論で何度か指摘しているように、青年期後期段階から成人期前期段階にかけて、SE を有意に上昇させ (三田、2008b)、性格特性も、社会適応する形に大きく変えていった (三田、2010) 群である。否定的な自己の側面への重視度を減少させたことと関連があると考えられるべきだと思う。

#### 4. 総括的討論

本研究の目的は、親への依存心・服従心によってグループ分けした4つの群、すなわち、「高依存・高服従」群、「高依存・低服従」群、「低依存・高服従」群、「低依存・低服従」群の青年期後期段階での特徴を明らかにし、成人期前期段階で、各群の特徴が変容していく要因を検討していくものである。

青年期後期段階で、有意差が見られた因子については、「低依存・低服従」群が、4群間で、全て最も低い得点を示した。これが、これまでの研究 (三田、2008b,2010) と異なるところであり、得点上の差異から、青年期後期段階の4群間の特徴を検討することが出

来た。

自己規定要因を測定する SEI-B は、前述の通り、Janis I.L.と Field P.B.A. (1959) が作成した *Feeling Inadequacy Scale* のうち、「不適切な感情 (feeling inadequacy)」領域がその原型になっている。そして、その質問内容のほとんどが、自己の否定的な側面を意味するものになっている。自己の否定的な側面に、「とらわれを持つことなく」、「重要ではない」と回答した調査対象者が「低依存・低服従」群ということになる。量的な SE や性格特性 (内的準拠性) が類似していても、自己不全感をもたらすような質問文に、「とらわれ」を持たず、重要なことではない、と考えている青年期後期段階の群、すなわち、「低依存・低服従」群が、成人期前期段階に、量的な SE を有意に向上させ、性格特性は、YG 検査でいうところの、積極的安定型 (D型) の傾向を強める心理的構造に変化させていった。

成人期前期段階で心理構造が変容する／しないための要因として、本研究で明らかになったことは、青年期後期段階において、外面的で否定的な自己の側面に対する重視度の程度、その側面に対する「とらわれ」を持つ／持たない、要するに、外面的で否定的な自己の側面に対する自己規定の有／無がその要因となっている、ということであった。

最後に、以下のことは、以前 (三田、2010) にも同様の指摘をしたことであるが、本研究でも記載しておく。

本研究は、男性との比較を行っていないため、このことがそのまま女性の自己形成の特徴だとは、明確に指摘はできないと考えている。また、個人の発達過程を考えた場合、青年期後期段階で「高依存・高服従」群であっても、成人期前期段階になると「低依存・低服従」群に移行している場合も十分想定できる。しかし、本研究は、あくまで横断的研究であることに留意していただきたいと思う。

## <引用・参考文献>

- ・遠藤辰雄 (編) 1981 *アイデンティティの心理学* ナカニシヤ出版
- ・Epstein, S. The self-concept revisited, or a theory of a theory. *American Psychologist*, **28**, 404-416, 1973.
- ・Fairbairn,R 1952 *Psychoanalytic studies of the personality*. 山口泰司 (訳) 1995 *人格の精神分析* 講談社学術文庫
- ・藤原正博 1981 自我同一性と自尊感情の関係 遠藤辰雄 (編) *アイデンティティの心理学* ナカニシヤ出版 85-89.
- ・Janis,I.L.,and Field,P.B. 1959 Sex differences and personality factors related to persuasibility. In Hovland,C.L.and Janis,I.L.,( Eds.) *Personality and Persuasibility*.New Haven:Yale Univ.Press.pp.55-68.
- ・加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 *教育心理学研究*, **28**, 336-340.
- ・三田英二 1984 *Self-Esteem* に関する研究 (1) - 青年期の発達的变化について -、*関西学院大学文学部教育学科年報*, **10**, 29-38.
- ・三田英二 1994 重視される自己の諸側面と性格特性に関する一研究 - 女子青年を被験者として - *関西学院大学文学部教育学科研究年報*, **20**, 1-6.

- ・三田英二 1996 重視される自己の諸側面と性格特性に関する一研究（Ⅱ）－女子青年の肯定的自己認知についての検討－ 臨床教育心理学研究、22, 1-4.
- ・三田英二 1999 重視される自己の諸側面と性格特性に関する一研究（Ⅲ）－女子青年の否定的自己認知についての検討－ 静岡県立大学短期大学部研究紀要、12-2, 85-91.
- ・三田英二 2003 独立意識からみた女性の自己の発達、青年心理学研究、15, 1-15.
- ・三田英二 2004 「独立意識からみた女性の自己の発達」へのコメントに対するリプライ 青年心理学研究、16, 46-51.
- ・三田英二 2008a 自己規定要因からみた女性の独立意識－発達の観点から、青年期後期と成人期前期の比較－、静岡県立大学短期大学部研究紀要、21-W-6, 1-16.
- ・三田英二 2008b 発達の観点からみた女性の親との心理的距離と Self-Esteem の関係、静岡県立大学短期大学部研究紀要、21, 37-48.
- ・三田英二 2010 発達の観点からみた女性の親との心理的距離と性格特性との関係、静岡県立大学短期大学部研究紀要、24-W-2, 1-22.
- ・三田英二 2016a 青年期女性の親との心理的距離と Self-Esteem の質について（1）－性格特性との相関関係からの検討－ 静岡県立大学短期大学部研究紀要、30-W-1, 1-14.
- ・三田英二 2016b 青年期女性の親との心理的距離と Self-Esteem の質について（2）－自己規定要因との相関関係からの検討－、静岡県立大学短期大学部研究紀要、30-W-2, 1-13.
- ・岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版
- ・Tesser,A. 1988 Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L.Berkowitz (Ed.), Advances in experimental social psychology, 21, 181-227. Academic Press.
- ・渡邊恵子 1995 自立再考 柏木恵子・高橋恵子（編著）発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房 77－101.

付録1 独立意識尺度の因子分析結果（回転後）  
（三田、2003 を一部改変）

	I	II	III	IV	V	共通性
6. 人の意見もよく聞くが、最終的には自分で決断できる。	.740	-.014	-.031	.036	-.056	.553
8. まわりの人と意見がちがっても、自分が正しいと思うことを主張できる。	.712	.046	.016	.294	-.109	.608
5. 生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。	.699	.008	-.257	-.077	.038	.562
36. どうしたらよいか、自分で決心できないことが多い。	-.661	.139	.276	.278	.275	.686
4. 自分自身の判断に責任を持って行動することができる。	.625	-.125	.026	-.135	-.059	.429

35. 他人の意見や流行こ、つい引き込まれてしまう。	-.585	.049	.043	.203	.237	.443
7. 生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。	.583	.227	-.345	.115	.108	.535
10. 自分の意見を言えずに、相手に従ってしまうことが多い。	-.570	.190	.222	-.111	.262	.491
9. 小さなことでも、自分で決断することができない。	-.519	.026	.186	.120	.216	.366
22. つらい時、悲しい時、親のことがますます頭ご浮かぶ。	-.035	.831	.051	.002	.059	.698
20. 親といっただけで何となく安心できる。	-.060	.795	.148	-.067	.021	.662
24. 親は自分の心の支えである。	.014	.786	.014	.030	.018	.620
23. できることなら、いつも両親と一緒にいたい。	-.014	.783	.026	-.056	.057	.620
21. 困った時は親に頼りたくなる。	-.141	.714	.149	.010	-.025	.553
25. 何かする時は、親にまねてもらいたい。	-.049	.653	-.078	.260	.312	.600
33. 両親に対して自分のことを打ち明けて話す気がおぼれない。	-.143	-.645	.048	.259	.160	.531
27. 親に何かにつけ、味方になってもらいたい。	-.073	.543	-.086	.256	.382	.519
14. 将来、どんな職業をついたらよいかわからない。	.015	.062	.857	.028	.126	.755
13. 自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。	-.194	-.005	.758	.150	-.010	.635
3. 時分の将来の進路や目標を自分で決めることができる。	.324	-.121	-.687	-.023	-.159	.618
31. 両親に反抗し、あとで後悔することが多い。	-.067	.177	.064	.698	-.180	.560
30. 親や先生のいうことには、たとえ正しくても反対したくなる。	-.010	-.030	.063	.691	-.098	.492
28. 両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。	.113	-.325	.110	.575	-.031	.461
37. いつでも相手になってくれる友達が多い。	-.290	.113	-.047	.531	.066	.385
18. 親にさからえないで、言うとおりになってしまうやすい。	-.124	.025	.141	-.033	.748	.597
29. 親の言うことには素直に従っている。	.007	.295	.029	-.329	.637	.602
26. 自分で決心できないときは、親の意見に従うようにしている。	-.065	.469	.035	.153	.543	.544
34. 親に対して自分の意見を主張したいが、自信を持ってない。	-.267	-.300	.031	.213	.526	.484
17. たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひなめを感じることはない。	.279	.003	-.110	.037	-.517	.359
1. 自分の人生を自分で築いていく自信がある。	.495	-.014	-.472	-.159	-.112	.506
2. 人生で出会う多くの困難は、自分の力で克服することができると思う。	.291	-.023	-.363	-.248	.079	.285
11. 社会の中で自分の果たすべき役割があると思う。	.466	.119	-.423	.026	.015	.412
12. 自分の考えが変わりやすく自信をもてない。	-.488	.070	.171	.413	.145	.464
15. 自分の意志で、欲望や感情をコントロールする(かまんしたり、調節したりする)ことができる。	.134	.029	-.155	-.493	-.246	.346
16. 自分の考えや行動を抑えられたり、統制されたりすることには強い反発を感じる。	.151	-.097	-.229	.418	-.034	.261

19. 外から与えられたわくの中で生活する方が安心できる。	-.148	.133	.481	-.049	.334	.385
32. 大人に対してひげめを感じることも多い。	-.081	.116	.259	.446	.304	.378
二乗和	7.48	4.83	2.85	2.02	1.83	
寄与率(%)	20.2	13.0	7.7	5.5	4.9	
$\alpha$	.850	.876	.809	.619	.680	

付録2 SEI-B の因子分析結果 (回転後)  
(三田、2008a を一部改変)

	I	II	III	IV	V	共通性
22. 友達や知り合いの中に、あなたのことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えると、そのことが心配でならない。	<b>.755</b>	.235	.007	.002	.005	.633
23. 他人があなたのことをどのように考えているか気になる。	<b>.694</b>	.009	.137	.101	.181	.551
19. 他の方があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて、気になる。	<b>.669</b>	-.001	-.097	.224	.112	.520
21. 自分の意見に同意しない人々を説得している場合、自分が相手にどのような印象を与えているか、気になる。	<b>.571</b>	.155	-.002	-.168	-.489	.618
12. 人前を気にしたり、はにかみをおぼえる。	.000	<b>.735</b>	.106	.134	.116	.584
13. クラスや自分と同年輩の人々のグループの前で話すとき、心配したり、不安になる。	.158	<b>.617</b>	.006	-.102	.009	.428
11. 他の方がすでに集って話し合っている部屋に、自分一人で入っていくような場台に、気兼ねや不安をおぼえる。	.152	<b>.600</b>	-.008	.008	.317	.496
14. 他の方が見ている所で、ゲームやスポーツをやっており、それにぜひ勝とうと思っている場合に、とり乱したり、まごついたり(あがったり)する。	.004	<b>.582</b>	.125	.247	-.242	.476
6. 自己嫌悪をおぼえる(自分で自分がいやになる)。	.101	.008	<b>.710</b>	.199	.004	.562

5.あなたが、自分について落胆するあまり、何が一体価値あるものだろうと、疑いをおぼえる。	.129	-.003	<b>.674</b>	.003	-.273	.549
8.自分には、うまくやれることなど全然ないといった気持ちになる。	.006	.010	<b>.621</b>	-.005	.004	.403
2.自分が価値ある人間であるか。	.005	.007	<b>.543</b>	.364	.108	.446
10.あなたの仕事ぶりや、成績を審査する立場にある人の批評が気になる。	.222	.221	.005	<b>.633</b>	-.001	.502
9.自分が他の人々と、どのくらいやっつけていけるかを気にする。	.230	.372	.153	<b>.572</b>	.113	.555
3.自分の知ってる人々が、いつかはあなたを尊敬の眼をもって仰ぎみる日がくる。	.001	-.008	.109	<b>.556</b>	.010	.338
18.初対面の人に会ったとき、時間つぶしに話しをするのがむずかしい。	.147	.293	.118	.002	<b>.766</b>	.709
16.人と一緒にいるとき、どんなことを話題にしたらよいか困る。	.285	.218	.228	.290	<b>.535</b>	.551
1.あなたの知っている大部分の人々に比べて、自分の方が劣っている。	.401	.010	.362	.005	.265	.374
4.自分の過誤（ミス）は自分のせいだと感じる。	-.006	.004	.489	.003	.184	.278
7.あなたが、自分のいろいろの能力について、自信をもてるか。	-.310	.225	.166	.177	-.273	.278
15.他の人々から、優等生とみられているか、あるいは劣等生とみられているか、気になる。	.498	.147	-.001	.367	-.150	.427
17.「とんでもないミスや、ばかにされるような大失敗をしでかしたときのことが、気になる。	.378	.424	.004	.108	.264	.406
20.恥かしくてどうにもならないと思う。	.121	.395	.383	-.377	-.003	.461
二乗和 寄与率 (%) $\alpha$	4.86	1.88	1.66	1.43	1.32	
	21.2	8.2	7.2	6.2	5.7	
	.704	.632	.639	.525	.637	

(受理日：2019.3.27)